

アンデス遙か

—ワスカラン・スール（6768m）登山報告書—



ワスカラン・ノルテ（左）とスール（右）

北山峰生 & 山内哲文



アタックの朝 C1予定地点付近を登高中に朝日が射す



セラック帯の通過 5500m付近の危険地帯（アタック途中）



セラック帯の下降



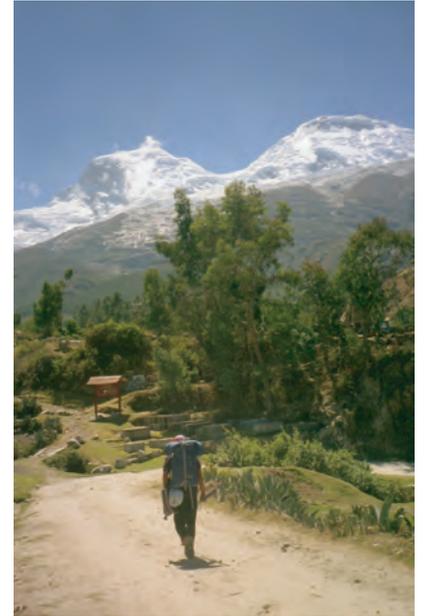
アタックの一コマ



ワスカランタ景 (MCより)



ワラス近郊より望むワスカラン



いよいよスタート
ムーシヨの登山口にて



BCまでの道のり
疎林帯を行く



MCでの一時
アタック前夜のくつろぎ

高所順応？
束の間のやすらぎ



はじめに

2人で相談を繰り返す。必死のパッチで休みを取っても、盆に近い時期の1週間。それに前後の土日をあわせた9日間で、行って帰ってこようと考えた。だが、フライトの時間や現地での移動手段との兼ね合いから、最低でもあと2日は実働日数が必要だ。で、結局11日間の予定で飛び立つこととなった。

目指すはペルーの最高峰、ワスカラン。そもそも南米大陸の西縁に沿って南北にのびるアンデスは、ブランカ山群とワイワッシュ山群に分けられる。このブランカ山群のうち、コルディエラ・ブランカにアンデスの高峰は集中している。ワスカランはじめ、世界で最も美しい峰とも評されるアルパマヨも然り。そして、それらのピークを目指すのに、拠点となる町が、ワラスである。ありがたいことに、リマからワラスへはバスの直行便が出ており、1日行程で到着する。つまり、日本を出発して翌日にはワラス入りし、即入山体制が整えられるということである。

アンデスが初めての私達は、一応ワラスで一日滞在し、物資の購入と情報収集に努めることとした。その結果、登山活動に当てられる実働日数は、5日間。この5日ですべての決着をつけるのだ。ペルーの8月は冬であるが、しかし6月～8月が乾期にあたり、登山・トレッキング適期とされている。ただ、盆近くになるとクレバスが発達するので、ルート状況の確認は欠かせない。

以下に報告するように、最終的にはロング・アタックを敢行するものの途中で断念し、高度5700m付近を最後に引き返す結果となった。頂上まではたっぷり1000m以上も残し、無念の下山であった。しかしながら、そのことは決して「失敗」ではない。私たちは、目的をもって全力で取り組んだし、そして確かな経験を身につけて、帰ってきたのだから。

1.対象地

ワスカラン・スール (6768m) 北西面ノーマル・ルート

2.目的

ラッシュ・スタイルによる高所登山

3.メンバー

氏名	性別	年齢	自宅住所	勤務先	会歴
CL 北山 峰生	男	29	奈良県橿原市		泉州山岳会8年
山内 哲文	男	29	兵庫県神戸市		泉州山岳会5年

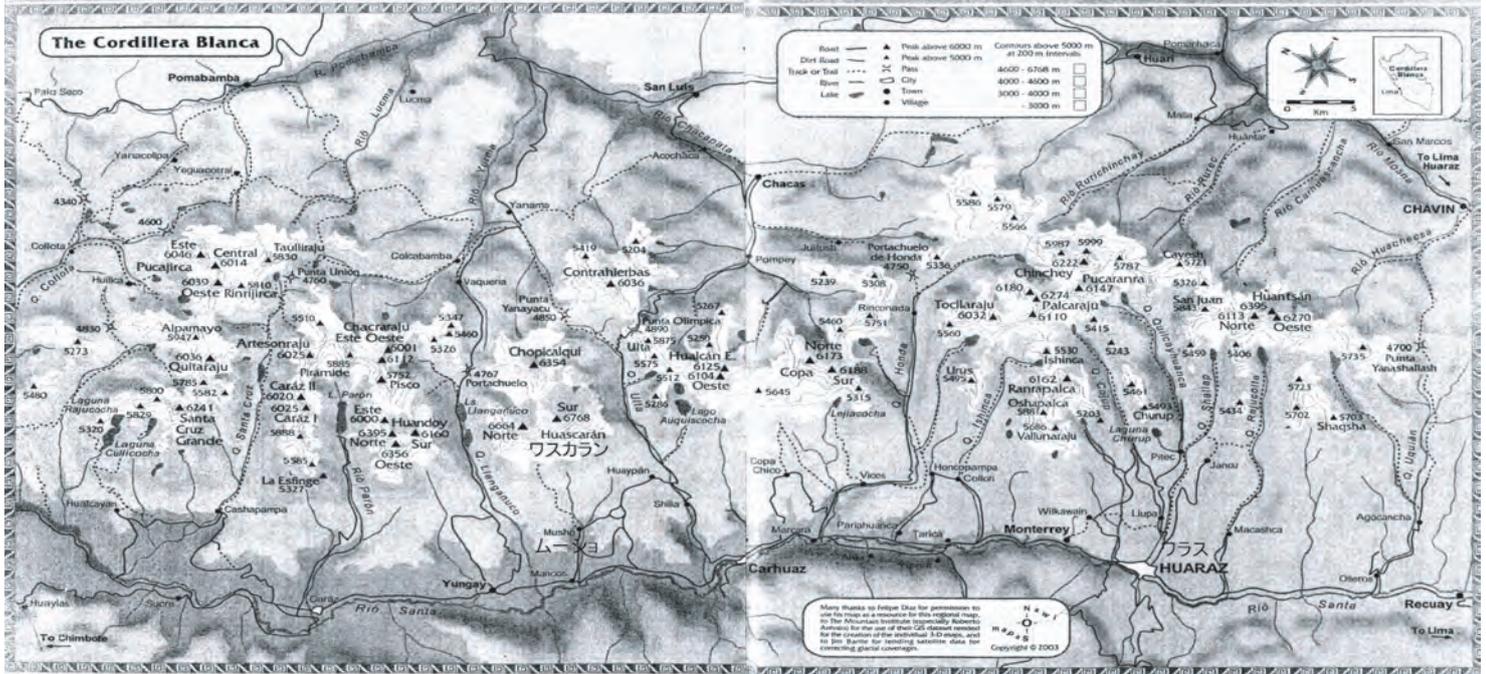


<< 北山 峰生

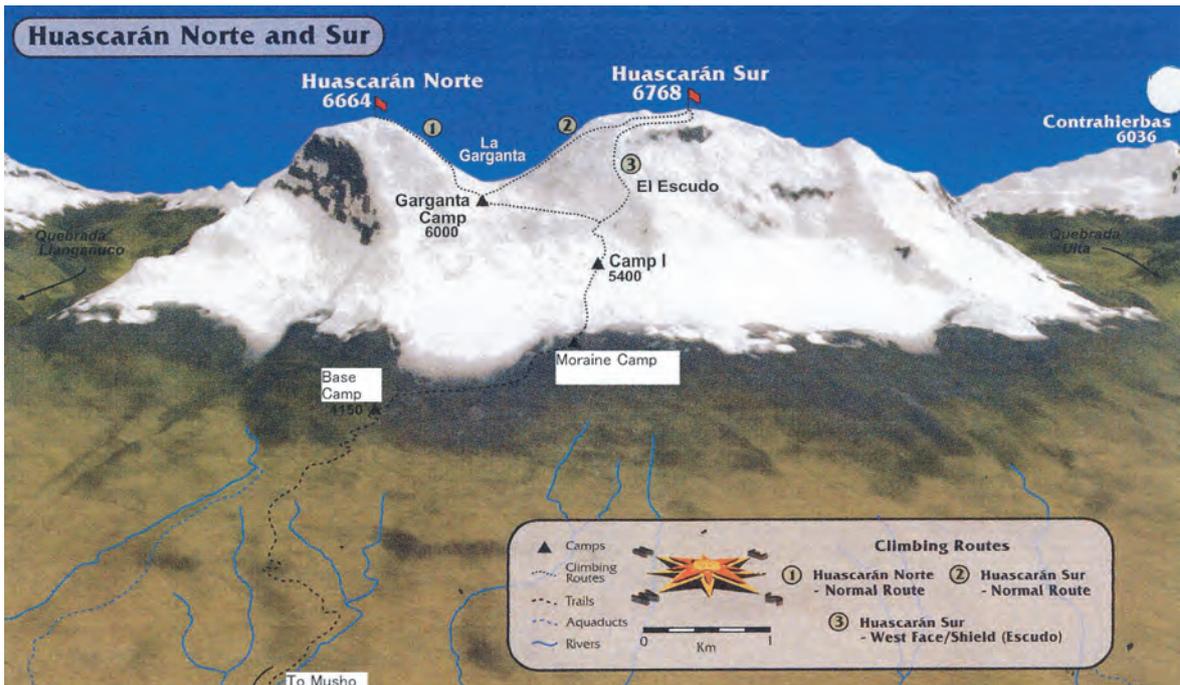


山内 哲文 >>

4.地 図



コルディエラ・ブランカ概念図 [B.Johnson,2003] より一部改変して引用



ワスカラン ルート概念図 [B.Johnson,2003] より一部改変して引用



ワスカラン周辺 地形図
Alpenvereinskarte Cordillera Blanca Nord(Peru)を一部改変；縮尺不同

5.行動記録

8/6(金)	成田より離陸、ダラス経由でリマ到着(泊)
8/7(土)	リマよりバスにてワラスへ移動(泊)
8/8(日)	ワラスにて準備(泊)
8/9(月)	ワラス ムーショ BC
8/10(火)	北山:BC モレーン・キャンプ(MC) 山内:BCよりMC往復
8/11(水)	MCにて山内と合流後、順応行動(MC泊)
8/12(木)	アタック、5700m付近より撤退(MC泊)
8/13(金)	MC ムーショ ワラス(泊)
8/14(土)	ワラスよりバスにてリマへ移動、深夜搭乗
8/15(日)	機内泊
8/16(月)	成田到着

8月6日

18時のフライトで成田発。約11時間半かけてダラス到着。トランジットをすませ、さらに飛ぶこと約7時間、深夜0時すぎにリマ到着。あれだけたっぷり眠りこけたのに、もとより時間が遡っているのが不思議だ。オカマのうろつく深夜のリマをタクシーでぶっ飛ばし、予約してあったホテルにすぐさまチェック・イン。まずは缶ビールで乾杯し、期待に弾む胸をおさえつけて、文字通り一夜の夢を結ぶ。(北山)

8月7日

さっそくワラスへ向けて移動する。Javier Pladoを9時半に出るバス(クルス・デル・スール)に乗り込み、果てしなく続く砂漠の中を揺られること約8時間、夕暮れ時のワラスへ到着。Casa de Guireを探しだし、一通りの情報を仕入れるが、今年は例年になく雪が多く、条件は悪いとのこと。ワスカランは、珍しいことに数パーティのアタックを跳ね返し、今季初登頂がなされていないらしい。適当なホテルにチェック・イン。

ワラスは結構な街で、ネパールのポカラの雰囲気によく似ている。日本を出る前からずっと、バタバタしていて落ち着かなかったが、ここに来て一気に気分は高揚。かつて胸をときめかせたヒマラヤの山並みと、目の前に望むアンデスの白い峰とがオーバーラップして、心ははや稜線の彼方へととんでいった。(北山)

8月8日

遅い朝食のあと、市場で食糧の購入、山道具屋で装備の調達。物価は安いし、道具も豊富、チタンのアイススクリュエはおみやげに買って帰ろう。

看板も何も出ていないSol Andino(ホテル兼業のエージェント)を見つけて、チェック・イン。これで一安心。昨夕の宿が15ソレスに対して、こちらは10\$と、相場の倍ほどするのは安心料のようなもの。

今日もワラスはいい天気。アイガー北壁を思わせるようなリマリマ、雪庇をいただいたランラパルカなどが望まれるが、ワスカランは雲の中。

パッキングを終え、上等なレストランでステーキをたらふく食べると、あとは床について時を待つだけ。興奮しているのか、まったく寝付けない。朝が来ると出かけなければならない。もうすこし時間がほしい.....

やがて夜が白み始めると、もはや待たはきかない。意を決して行くだけだ。(北山)



出発直前、ホテルにて >>

8月9日（1日目）

入山 ワラス（車） ムーシヨ（3010m, 11:10） BC（4150m, 20:40）

朝、ワラスの宿屋ソル・アンディーノから車で出発（9:45）。天気は、快晴、空気は乾燥しており、日差しはとてもきつい。道行く地元の人々は、男も女も北山君（日本人にしては焼けている）よりも日焼けしている。雪をかぶったアンデス山脈を左上に見ながら、谷沿いの道を北東へ走る。途中で、ワスカラン北峰&南峰が見えてくる。「でかいなあ。まじで。」今までに見たことのない大きさだ。今からあそこへ登れる自分の状況に喜びを感じた。

今回の山行は、5日間の行動で、3010mから6800mへ登る計画である。登頂を確実に狙うのであれば、事前に5000m以上の山に登って高所順応してから登るか、もっと日数をかけて高所順応しながらゆっくり登るかする必要はある。がしかし、我々は日本の社会人なので、仕事を休める日が短い。限られた条件で、最大限の活動をするためのタクティクスが必要である。今回は、11日間の夏期休暇で南米6000m峰登頂を目指した。タクティクスは北山君が考えた。あとは山へ行くだけだ。

車は、マンコスという小さな町を過ぎて、舗装されていない道路を山の方へ向かって登っていく。車中から見えた炭鉱はスペイン語で「ミオ・デ・カルボノ」、ユーカリの木は「エカリプト」ということを運転手のおじさんに教わった。マンコスから30分位でムーシヨという村に着き、車を降りた。

このムーシヨが登山口の村となる。村の道の真ん中で、ロバの背中に大きな木の箱をくくり付けている人がいた。子供が、寄ってきて我々の様子をじーっと見ている。近所のおばさんが北山君に「ドンキー？（ロバ雇うの？）」って聞くと彼は、私を指さし「こいつがドンキー。」と言いやがった。私は、「ヨ、ドンキ（俺、ロバ）」って言ってやった。おばさんは笑った。我々の荷物は、5日分の食料+装備で、1人あたり20kg弱程度だったので、ベースキャンプまでのロバ&ロバ使いを雇う必要がなかった。

村の駄菓子屋で、炭酸ガス入り水を買ひ、事務所で、国立公園入園料を払った。そして、はるか高い所に聳えるワスカラン南峰へ向けて歩き出した（11:10）。

ムーシヨ（3010m）からBC（4150m）までの道は、村 ユーカリ林 林道 尾根を通る。高度順応するために、鼻歌または口笛を吹きながらでも歩けるペースで、ゆっくりと歩く。大体、富士山の五合目から山頂までを6時間で歩くスピードだ。林道から先は、視界を遮る木も、雲も、霧もない。強い日差しの下、遠くのものまではっきり見える。尾根に上がってからは、驚いた。尾根上が放牧地になっていた。何頭もの牛が急な斜面をトラバースしてこっちへ近づいてきていた。

尾根上を歩いている途中で、夕暮れて来たので写真を撮っていると、あっという間に、向こうの方の山へ日が沈んでいく。暗くなってから、ロバに乗って叫びながら上がってくる欧米人パーティーに追い越された。BCへの道は、尾根の途中で尾根すじから離れて、トラバースした後、ジグザグ道の樹林帯の急登を登れば終わりだ。このジグザグ急登が思いのほか長かった。すでに高度は富士山山頂を超えていたので、ゆっくり歩いても異常に息が切れる。結局1時間以上かかって、ジグザグ道を登りきってBCに着いた（20:40）。見上げてみると「なんじゃこりゃー」と言いたくなる満天の星空。空ぜんぶが天の川だ。

テント内では、二人とも生き生きして、会話がはずむ。町のホテルでいた時より元気になったようだ。市場で買った野菜とスープの素で作ったスープに、にんにくをナイフでスライスしたものをどばっと入れる（北山君がヒマラヤのシェルパから聞いた話によれば、にんにくは高山病に効くらしい）。北山君は、「アンデスまで来ても、やってることは合宿と同じやな。」と、にんにくを切ってる山内の写真を撮った。食欲減退気味なので、スープは半分残して明日の朝用にした。寝るとき、腹式呼吸を意識して寝た。（山内）



BCへの道 >>

<< ムーシヨの
メインストリート



8月10日(2日目)

MC入り BC(4150m, 8:00) MC(4900m, 12:00)

目覚めると、軽い頭痛と、吐き気を催していた。「これが高度障害か。」と思った。山内は、BCの高度での順応をすることを優先するべきとの判断により、今日は、山内はモレーンキャンプ(MC)(4900m)までをほぼ空身で往復し、北山君は、モレーンキャンプの小屋で寝ることにした。

快晴。今日も、それぞれのペースで、ゆっくりゆっくりと歩く。BCからMCまでは、超巨大な一枚岩の花崗岩スラブ帯を約3kmトラバースをする必要がある。ルートは花崗岩の上なので、いわゆる踏み跡はなくて、小さいケルンが目印となる。が、途中で道を間違えて崖っぷちに追い込まれた。「シンギア(ガイドなし)やからな。こうゆうこともあるやろ。」と言いながら引き返して30分くらい口スした。

花崗岩スラブの歩きは、プラ靴のフリクション(摩擦)がよく効いて楽しい歩きだ。巨大な象の背中を歩く感じ。途中から、目指すワスカラン・スールの白い山頂が見えてきた。「なんだ、意外と近いやんか。待ってるよ絶対登ったからなー。」という感覚が体にみなぎってきた。が、現実には、ちょっとでも飛ばすと息が切れるため、すさまじい歩みの遅さであった。

高所での行動においては、普段考えないようなことまで考えてしまうと言われている。私の場合、例えば、自分が将来するであろう結婚式において、花嫁が最後に両親に対してするスピーチの内容を、一言一句仔細にわたって考え出し、それに自分で感動して泣きそうになるというおかしな現象が起こった。

モレーンキャンプ(4900m付近)には、新しい小屋があるという情報を、ワラスの宿で出会った丸山さんに聞いていたが、その立派さは、想像を絶するものであった。おそらく、ワラスにあるどんな建物よりも頑丈で、快適な作りであろうと思われる。そして、小屋には英語を話せるセニョリータ(お姉さん)がいて、北山君は気に入ったようだ。

小屋でコーラを飲んで休憩をしてから、もうちょっと高度に順応するため、氷河の取付きを目指して、ゆっくりと歩き出した。小屋から先は、ワスカラン・スールの山頂へ向かってまっすぐ進んでいくルートとなる。小屋から200mくらい登ったところから氷河が始まり、その氷河の上にワスカランが乗っかっている感じだ。この辺は、ワスカランが見えるし、小川が流れているし、素晴らしい場所だ。今日は氷河まで行って帰って来よう。と張りきって小屋を出たけど、今までになく息があがるようになり、時々立ち止まって10回くらいハアハア言わなければ進めなくなってきた。その横を、順応済みの欧米人が、普通にさくさくと登っていく。「ちくしょう。順応したらあんなに動けるようになるんか。」と高度順応の重要さを思い知った。

2時間近くかかって氷河の取付きにたどり着いた。いよいよアイゼン、バイルを装備して、氷河に足を踏み入れる。ついに氷河デビュー。アイゼンが氷にささるときの感覚は、今まで経験したことのないものだった。硬くて刺さりにくいけれど氷面の凹凸が細かく崩れやすい感じだ。アイゼンワークに集中していると、高度障害を少し忘れた。氷河上はクレバスさえ避けていけば、どこでも歩ける。しかし、氷の下から常に小川が流れる音がしていたため、表面が薄い所へ踏み込んで、小川に足を突っ込まないか心配だった。10分ほど氷河を登ったら午後3時になったので、渋々引き返すことにした。ちなみに、北山君は、氷河には上がらず、写真を撮ったり、寝そべったりと高度順応を謳歌していた。

北山君は小屋に泊、私は、BCに一人で下った。BCまで降りてくると、朝と違って、食欲もあり、吐き気も頭痛もなかった。BCの高さには順応しているみたいだ。今日は氷河がたくさん解けたようで、BC付近の水場の水は濁流となっていた。この日、私の行動食はオレオ3枚、夕食には、山菜おこわに乾燥野菜と餅をいれて食べた。水は一度沸騰させたものだけを飲むようにした。(山内)



<< MC付近から頂上を望む

8月11日(3日目)

MCステイ BC(4150m, 7:05) MC(4900m, 9:45)

AM5:30起床、ラーメンを食べて、テントを畳んで7:05BC発。快晴。今日は、C1(5400m)まで行く予定。北山君は、先にC1へ向かっているのだろうかと思うと、気がはやるが、そこを抑えてゆっくりと歩いた(つもりだった)。小屋までの道で、アンデスうさぎに出会う。写真を撮ろうと追いかけた瞬間に息が上がって、うさぎは逃げた。私にとって、「うさぎおいしかの山」=ワスカランとなった。

9:45モレーン小屋着。北山君は先行ってるやろと思っていたが、小屋のセニョリータは、「彼、上で寝てるわよ。」と言うので、二階へ上がった。北山君は、ちょうど起きたとこみたいで、「早かったなあ。」と言った。ゆうべから、気分が悪くて何も食べてないそうだ。そこで、今日は、C1へは上がらずに、小屋から10分くらいのMC(モレーンキャンプ)にテントを張って、C1あたりまで、高度順応に行くことにした。その結果、明日のアタックは、MC4900m~山頂6768mで高度差約1800mとなる。アタックは厳しくなるが、順応を優先させる判断だった。

MCから氷河までの登りは昨日に続き2回目だが、あいかわらずの息の切れようだった。一回登っただけでは順応しないようだ。13:30氷河への取り付き地点に着く。氷河へ取付いて、昨日の到達点より先に進んだかなと思っていたら、急に頭がガンガンしてきた。立ち止まって、これでもかと腹式呼吸して酸素を送り込むが、一向に治まらない。脳が、「酸素が足りん!酸素が足りん!」と警告を発しているのがよくわかる。立ち止まっている時間がほとんどで、前進しなくなった。こんな経験は初めてだ。ここは、無理してでも進んだ方が順応がうまくいくのかな。と考えたりもした。が、北山君の「今日は順応の日やから無理せんほうがええ。」という一言に全面的に賛成した。この日は、C1を見ることができなかった。

氷河を降りる途中で、ポーターが、プロパンガスとザック2,3個を背負子に着けてザクザクと登ってくるのにすれ違った。「あれ、40kgぐらいあるんとちゃうか。強いな~。」高度障害でふらふらの私には、ポーターが超鉄人に見えた。16:15MC着。夕食は、チキンドリアを二人で1食分とニンニク入りみそ汁。明日のアタックに備えてはやめに寝る。(山内)

8月12日(4日目)

アタック MC(4900m, 1:50) C1(5400m, 10:30) 5700m地点(12:00) MC(15:15)

いよいよアタックの日、AM0:30起床。ワスカラン南峰を目指しての長い一日になりそうだが、目覚めた時の気分は悪く、少し頭痛がする。スープと茶を飲んで、ヘッドランプを付けて1:50出発。歩き出すとすぐに頭痛は消えた。1800m高度差の頂上を目指して、心は燃えていた。昨日までと違って立ち止まらなくても息が切れない。順応してる、行けるぞと感じた。しかし、暗いために、途中でルートの間違え、氷河へ取り付く地点が分からなくなってしまった。「ヘタに動かん方がええ。明るくなるまで待とう。」ということで、セーターを着て、シュラフカバーを被って座り込む(3:30頃)。氷河から吹き降ろす冷気が寒くて、ぶるぶると震えながらも、うとうとと眠った。6:30頃明るくなったので、行動再開。取り付きはすぐに分かった。今日も天気は快晴。

氷河に乗ってからC1までは、傾斜は緩いが、長い道のりだった。昨日のように、激しい頭痛は起こらなかったが、ゆっくり歩いても息が切れた。そして、はあはあ言ってるのに、体温が上がらず、寒くて体がプルプルと震えていた。こんなことは始めてだ。酸素が十分に行き渡らないと体は暖まらないらしい。すでにセーターを着ているので、これ以上着るものはない。羽毛服はホテルにおいてきている。しかし、太陽がワスカラン南峰の向こう側から顔を出し、光が射してくると暖かくなった。



<< MC~C1間の氷河

歩いている途中で、山頂の方を見上げるとC1から先のルートを入が登っているのが見えた。「ほほー。あそこを登るのか。」と参考になった。C1から先は、セラック帯になっている。そのセラック帯に、カンデレッタと呼ばれる巨大な砂時計の形をした氷のガリーがある。はやくあそこまで行きたかったが、ゆっくりとしか歩けない。

10:30頃C1(5400m)を通過。そこから先は、傾斜が急になる。私にとっては、初めてのセラック帯体験だった。想像していたよりもスケールが大きかった。まるで、ビルディングが崩壊して折り重なっているようだった。しかも、見るからに不安定な状態でビルディング級の氷塊が折り重なっている。今にも崩れてきそうだった。こういう場所は、なるべく日が射さないうちにさっさと通過した方がよいと思った。

もし前の人のトレースがついていなければ、ルート・ファインディングが必要であった。日本国内では、セラック帯のルート工作は、経験できないので、今ここでルートを見極める感覚を身につけなければと思った。トレースは、ビルディング級氷塊の間を縫うようにして上へ続いている。氷塊の間にできたクレバスは、底が見えない程深い。クレバスの底はあの世にちがいない。1.5mくらいのクレバスをジャンプして超えなければいけないところがでてきたので、ワラスで買った1.2m位の長さのスノーバーを使ってザイルをfixして確保しながら飛んだ。ジャンプして超えた後は、息が乱れてひいひい言った。その後も、傾斜が急なので、ひいひい言いながら登った。この時点で、時間とペースを考えると登頂するのは明らかに無理であったが、完全にあきらめきれず、もしかしたら行けるかもと真剣に思っていた。文字通り息絶え絶え、それでも必死にバイルつきながら登った。突然、前に行く北山君が振り向いて、「このへんで、引き返そうか。残念やけど。12時になったら引き返そて決めとってん。」と言って、少し嘔吐した。「もう12時か。しゃあないな。」ということで、引き返すことになった。砂時計の下部にさしかかる地点だったと思う。C1(5400m)から200m~300mくらいの所だった。

下りは、登りよりは楽かなと思っていたが甘かった。下りも登りと同じように息が切れる上に、体力を使い果たしている分、力が入らなくてふらふらだった。こういう疲労感覚も初めてだった。いったん座りこんだら、二度と立ち上がれないんじゃないかと感じられた。北山君はどんどん先に下って行って、だいぶ遅れた。MC(4900m付近)のテントが近くなると、先に着いた北山君がテント横で寝そべっているのが見えた。見えているのにテントまでの道のりが、やたら遠かった。15:15MCのテントに着いて、アタックは終わった。ザックをほって、寝転んだ時には、寝返りを打つだけでハアハア息があがるほどに疲労していた。もしも、あれ以上登っていたら、帰ってくる体力が無くなっていたかもしれない。北山君の引き返す判断は絶妙なタイミングであったと思う。この日、私が食べた行動食は、羊羹50g、チョコバー30g2本、あめ2個であった。夕食には、吸い物に北山君定番メニューであるそうめんをいれた。うまかった。(山内)

8月13日(5日目)

下山 MC(7:30) BC(9:05) ムーショ(11:30)

6:00起床。起きると昨日の疲労は回復していた。テントをたたんで出発する時、頂上に登らずして立ち去るのが悔しかった。7:30MC発。あっという間の4日間だった。あと1日あれば、高度順応できて登れたかも、とか、来る前にもっと富士山に登って、3700mでの順応を完璧にしとけば登れたかも、とか考えた。MC(4900m付近)からムーショ(3010m)までの下りは、超快適で、アンデスの山の雰囲気満喫できた。何回もふり返ってワスカラン南峰を見た。9:05BC(4150m)発。下りは早い。BCからの下りで、北山君は、下る道を間違えたらしく、行きしに登ってきた尾根とは別の尾根を下っていた。「山内っ。」と谷を隔てた隣の尾根から呼ばれたときには、「なんで、そんな所に???」と思った。「こっちやでー。」と叫んだら戻ってきた。戻ってくるまで、岩の上に座って待った。村まで降りてきたとき、すれ違った地元のおばあさんに、行動食の残りとおホットチョコレート粉末の残りを全部あげた。おばあさんは喜んでた。11:30ムーショの登山事務所に着いて、下山報告をした。登山事務所の隣にある店で、コーラを飲んだ。店のおばちゃんにワラスまでの車を頼んだ。ワラスまで80ソレスで話がついた。車が来て乗り込むとき、店のおばちゃんに抱擁してもらった。一瞬、恋人と別れるときのような気分になった。(山内)

8月14日

夕べは、夜行のバスが満員でとれなかったため、結局ソル・アンディーノにもう1泊することとなった。おかげで、温水シャワーを浴びてゆっくりできた。じゃんけんで順番を決めて、先にシャワーを浴びた山内は、「水しかでえへんで！」と悲しそうな顔で出てきたが、実は赤マークと青マークのうち、青い方の蛇口が温水だった。

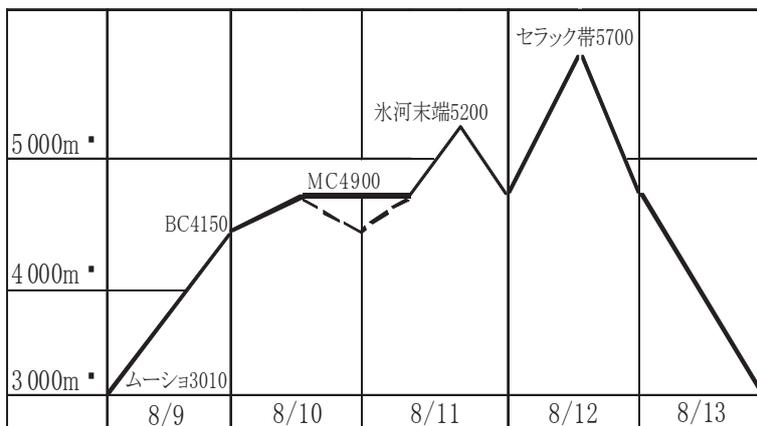
最後まで天気はよくもった。腹の調子も、万全だった。ただ、順応に割くべき日数だけが不足していた。いかんせん高度の問題は、根性や小手先のテクニックでは解決できないのだから、仕方ない。あきらめきれない気持ちと、やれるだけはやった、という安堵感とが交互に胸を去来した。

行きと同じクルス・デル・スール。再び砂漠の中を爆走して、夕方リマ到着。すぐさま空港へ向かい、チェック・イン。短い夏休みが、もう終わる。(北山)



<< 登山後 ワラスの宿にて

登高曲線



6. 装備

共装リスト

装備		単重量 (kg)	数量	総重量 (kg)
幕営				
	テント (2人用)	0.86	1	0.86
	ポール	0.20	1	0.20
	テントマット	0.20	1	0.20
	雪袋	0.10	1	0.10
炊事				
	ガスヘッド	0.15	1	0.15
	ガスカートリッジ(*)	0.45	1	0.45
	ガソリンコンロ	0.60	1	0.60
	燃料タンク	0.50	1	0.50
	ガソリン (リットル) (*)	1.00	2	2.00
	メタ (10個単位)	0.06	2	0.12
	ブス板	0.10	1	0.10
	テルモス0.5リットル	0.80	2	1.60
登攀				
	ザイル8mm25m	1.50	2	3.00
	アイススクリュー	0.13	6	0.78
	スノーバー(*)	0.45	2	0.90
	スコップ	0.60	1	0.60
その他				
	デポ袋			
	ろうそく	0.05	2	0.10
	医薬	0.15	1	0.15
	修理具	0.55	1	0.55
	カメラ	0.10	2	0.20
	標布	0.10	0	0.00
合計				13.16

(*)現地購入分

個装リスト

装備	備考	単重量 (g)	数量	重量 (g)
サブザック	30リットル	550	1	550
シュラフ	羽毛	500	1	500
シュラフカバー	ゴアテックス	400	1	400
マット	半身	120	1	120
下着	化繊	250	1	
靴下	1s=2枚重ね	200	1	
行動着	化繊	600	1	
防寒着	毛orフリース	500	1	500

装備	備考	単重量 (g)	数量	重量 (g)
羽毛服		250	1	250
帽子		60	1	
目出帽	毛orフリース	40	1	40
手袋	毛	70	1	
替手袋	毛	70	1	70
替靴下	1s	200	1	200
登山靴	ダブル	2900	1	
ヤッケ	上下, ゴアテックス	1700	1	1700
ロングスパッツ	予備ゴム	250	1	250
オーバー手袋		100	1	100
アイゼン	予備バンド	1060	1	1060
ピッケル		850	1	850
バイル		750	1	750
ヘルメット		450	1	450
ハーネス	セルフセット付	1100	1	1100
ATC 安環付		150	1	150
ユマール		200	1	200
シュリング		50	4	200
長シュリング		100	2	200
ロープシュリング		50	2	100
カラビナ		50	6	300
バール・箸	アルミorチタン	230	1	230
ポリタンク 2個	うち1個は金属製	200	1	2200
ナイフ		70	1	70
ライター		20	1	20
ヘッドランプ		150	1	150
予備球・電池	単3×2本	55	3	165
地図	Alpenvereinskarte Cordillera Blanca Nord(Peru) Austrian Alpine Club 2000	50	1	50
コンパス		30	1	30
非常セット	メタ・メタ台・マッチ ・ライター・予備電池 ・予備食	450	1	450
サングラス		30	1	30
細引き	3mm	1		
山行計画書		120	1	120
事故カード			1	0
筆記具・時計		150	1	150
ロールペーパー		100	1	100
持病薬	日焼け止め	70	1	70
貴重品			1	0
合計				13875

基本方針

全装備を担ぐ。高所順応が不十分な段階ではマイナス要因となるのであるが、自力活動が目的である以上、当然のことであった。したがって、考えられる限りの軽量化を図る。

2人同時行動を前提として、テントは1張り、ツェルトは用意せず。燃料はガソリンコンロ（スベア123R）を持参し、予備としてガスを1缶購入した。

登攀具は最小限にとどめ、氷河上のアンカー、あるいはクレバス帯のフィックス用に、スクリュールーケンおよびスノーバーを用意する。

その他の装備は、基本的に日本の冬山を想定した物である。今回雨具は用意しなかったが、天候次第では雨も多く降るらしく、一応念頭に置いておく必要がある。

現地購入

スノーバー、ガスカートリッジ、ベンジーナ（ガソリン）は現地で購入した。ワラスには山道具屋があちこちにあるし、かつツアー・エージェンツ兼業のレンタルも多く、一通りの物は何でも揃う。ガスは、二種類の規格が出回っているが、プリムスあるいはEPIに対応するのはTEKガスである。

過不足

最小限にとどめたつもりであったが、行動途中、毎日のように不要品をデポしていく結果となった。状況によるだろうが、替えの靴下・手袋はBCに残置した。氷河上の行動が少ないことを予感したからである。また、ガソリンは2L用意したが、7割くらいBCに残置したし、しかも持って上がった物も使い切らなかった。これは、普段の山行がガスに頼っているため、消費量の計算が甘かったためである。

今回、ツェルトは共装から省いた。MCに小屋が新築されていることもあって（出発前は知らなかった）、1回だけ別行動をとった。小屋がなかった場合、選択肢が限られることになるが、この点はいまだ解決策がみつからない。

全般的に、どれだけ切りつめても、入山後にさらに不要となる物が出てくるのは致し方ないと思う。はじめからそのつもりで、デポ袋は多めに用意しておくべきだろう。



クレバスをジャンプで越える（アタック途中）

7.食料

日付	行動予定	朝	行動食	夜
8/9	ワラス BC.		要	現地購入食
8/10	BC. C1	現地購入食	要	高所食
8/11	C1 C2	高所食	要	高所食
8/12	アタック	高所食	要	高所食
8/13	下山	高所食	要	

全行程の行動食とBCまでの食事は、現地購入。BCより上部での食事は日本から乾燥食品を持参した。乾燥食品の内訳は、以下の通り。

野菜ぞうすい40g	2袋	豚汁	2袋	素麺	150g
キノ&野菜がゆ57g	2袋	長ネギ味噌汁	2袋	大根菜	20g
五目ご飯100g	2袋	玉子スープ	2袋	乾燥椎茸	30g
山菜おこわ200g	1袋	コーンスープ	4袋	切り干し大根	30g
そうめん150g		松茸お吸い物	4袋		

行動食・嗜好品にビスケット、チョコレート、飴など。また、ココア、ココ茶、砂糖など、すべて現地で購入した。しかし、高所へ行けば行くほど、また体調をくずせば崩すほど、普段口になじんだものが欲しくなる。チョコレートやココアは、たいして味はかわらないが、やはり外国の物は癖があり、気分の悪いときには受け付けがたい。結局は日本から持参したコンビニのコーヒー、あるいは緑茶、ホットレモンなどが有効であった。

食事に関しても、今回2人とも食欲が極端に落ち込み、MC以上ではまともな食事を摂ることはできなかった。唯一好んで口にしたのはスープのみ。スープ類をもっと大量に用意し、嗜好品のようにいつでも飲めるようにしておくべきだ。

逆に、高所食はもっと減らしてもいいし、また一口かじる程度で十分であるとも思う。ただ、その一口が確実に喉を通るような物を用意するべきだ。個人的には餅などが欲しいと思った。BCまで持っていたのだが、デポしてしまったことを後悔した。

ジフィーズは、毎回思うのだが高所ではドロっとなってしまうので、うまく作れない。はっきり言って気持ちの悪いゲル状のものができあがるので、持っていけない方がました。おそらく気圧の関係があるのだろう。



下山完了 ムーショの登山事務所にて

8.健康管理

医薬

私達が普段の山行で持ち歩いているテーピングのほか、高所への対応として、鎮痛剤（アスピリン）およびビタミン剤を用意した。また、海外生活でもあるので、下痢止めも持参した。必須となるものはこの程度であろう。

高所登山でお題目のように登場するダイアモックスは、個人的に好かないので使用していない。また、目薬、日焼け止めなどは個人装備とした。

氷河上の事故として、骨折への配慮が必要となるであろうが、基本的にテーピングでの対応を想定している。

高所順応

基本的に、高山病の症状が出た以上は高度を下げる以外に対処策はない。したがって、いかに症状の表面化をおさえるか、つまり有効な予防策を講じるかという点に最大の配慮がなされるべきである。

1.予防 日本国内の準備段階では、とにかく富士山での順応活動&体づくりに重点をおいた。週末の富士山かよいは、結局5~7月までの、各月1回ずつが限度であったが、順調に効果を上げていた。特に、実際の山行時の重量と比高差を想定して、歩荷&歩行ペースの調整を同時におこなった点に意義があった。

文部科学省登山研究所にある低酸素室は、今回は利用しなかった。十分に体作りができてから、さらに4000m相当以上への低酸素環境への対応をめざすのであれば、有効であると思われる。

2.現地での対応 とにかくゆっくり歩くことと、大量の水を飲むことのみ。全般に順応が不十分であったため、行動のペースははかどらなかつた。ただし、BC入りの日は、特に意識的にペースを落としている。距離の長さを勘案すれば、今回のペースが限度であると思われるが、本来的にはもっとゆっくりでもいいと考える。

3.症状 BCにて1泊のあと、段階を追って諸症状が現れた。

	比高差	頭痛	倦怠感	食欲不振
ムーショ→BC	1100m	△	×	×
BC→MC	750m	×	○	○
MCステイ	—	×	×	○
アタック	800m	×	×	○
MC→BC	-1850m	×	×	×

症状の現れ方には個人差があるので、これはあくまでも個人的な覚え書きにすぎない。ただ、山内の発症状況ともほぼ一致しているので、ある程度一般的な傾向を反映しているものであろう。頭痛は高度に敏感で、歩きながらでも感じる場合がある。これは警告のようなもので、疲労や寒さにより増幅される性質の物と考えられる。したがって、高度の影響による危険範囲をどの程度に見積もるかは、事前のトレーニング（順応活動）の中で見極めるほかない。

順応の初期段階では倦怠感が著しく、ほとんど行動不能になってしまう。高度4000mを越えてからは、1日の高度差は500m程度に収めることが一般に勧められている。そのため、今山行ではBC→MC間の移動に、もう少し日数を当てることができれば、より順応が促進されたと考えられる。なお、ルート状況にくわしければ、装備を分割してダブルボッカにするのも、有効であろう。

アタックは、結果的に高度差1800mのロングアタックとした。もとより、十分に順応していない私達にとっては、望むべくもない行程であった。だが、5000mまでの順応に成功しておれば、十分可能な範囲と考えられる（ルート工作等の作業を度外視した場合）。

いろいろな表情 >>



8/8 リマ（高度約0m）



8/12 MC（約4900m）



8/13 ワラス（約3000m）

9.費用

摘 要		一人当たり、円換算
国内準備費（円）		
海外航空券（往復）	238000	
成田空港使用料	2040	
海外TAX	6100	
航空保険料	1800	
現地手配手数料（10000/2）	5000	
食糧品	8335	
医薬品	4588	
保険（海外登山対応）	8838	
合計	252940	252,940円
現地依頼分（ドル）		
リマホテル代（1泊39\$ /2）	19.5	
送迎車	20	
リマ/ワラス バス代	15	
合計	54.5	6,258円
滞在費・現地購入費（ソル）		
スノーバー	134	
TEKガス	20	
ベンシーナ2リットル	9	
行動食・嗜好品等	7	
ワラス宿泊代（3泊）	97	
入山料（20\$ ×2）	124	
ムーショ/ワラス タクシー代	80	
空港へのタクシー	25	
ワラス/リマ バス代（40S ×2）	80	
その他滞在費	291	
リマ空港税	94	
合計	961	32,839円
合計		292,037円

1\$ = 3.36S（ソレス） = 114.82円で換算（2004年8月現在）



<< リマ～ワラス間のバス

まとめ

気のあった仲間と海外へ。長らく眠っていた種が、山内というパートナーを得て、ようやく芽吹く時が来た。私たちのささやかな計画は、ほんのわずかな足跡を残して一夏の夢と消えたが、それはこれから歩むであろう道程の、第一歩にすぎない。

アンデスを対象としたのにはいくつかの理由がある。6000m峰を擁し、かつアプローチが短いこと。資料が多く、能力に応じた現実的なルートが選択できること。山域が外国人に解放されており、ガイドレスで入山可能であること、など。

つまり、私たちサラリーマンの短い休暇をフルに登山活動に当て、かつ自力で登頂をめざそうというだけのことで、それ自体は至極当然のことでもある。ただ、純粹にピークのみを目指すなら選択肢は多くあるのだが、あえて6000mの高度と登山スタイルにこだわったのは、当然ながらこの経験をふまえたその先を、見据えているからである。

この計画は、高所登山の経験の浅い私たちが、高所環境に対してどのような反応を示すか、なおかつそれを予防、あるいは克服するためにどのような手段が講じられるのか、ということの確認作業とした。したがって、登頂は二の次、限られた日数でどれだけ活動可能であるのか、という一種の試行である。結果はどうあれ、今後より大きな山行を実践するための、避けられない一つのステップであったと考えている。

最後に、今回の山行にあたり、物心両面でご協力いただきました翁長和幸・矢野岳志の両氏に、あつくお礼申し上げます。

泉州山岳会 北山 峰生

【参考資料】

ぶなの会『2000/2001 ペルーアンデス遠征隊報告』

花谷泰之氏ホームページ <http://www.hanatani.net/> (2004年8月現在)

Brad Johnson, 2003, Classic Climbs of the Cordillera Blanca



アンデス遙か

- ワスカラン・スール (6768m) 登山報告書 -

2004年12月24日

編集 北山峰生

〒634-0063

奈良県橿原市久米町641-21-105号